移り行く混迷の時代に　1

ピノコパパのエッセイ集より

pinokopapa

トッド氏を手掛かりに

移り行く混迷の時代に
下部構造が上部構造を規制するの一小節を手掛かりに、様々な議論を愚考してみましたが、結論らしいことは何一つ分からず投げ出してしまいました。こんなことを始めるきっかけは、あの奇妙な男が世界の最高権力者になったことでした。当初は、いつ破たんしても不思議はないとおもっておりました。案の定、その通りの破天荒な政権運営ぶりで、内側からも外側から破たんしそうにみえます。しかし、あの奇妙な男の起こした、もしくは起こそうとしている革命を、笑ってはいけないとトッド氏は言っておりました。そして、この男の起こした様々なアクションとその波紋をつぶさに見ていると、奇妙な感覚に襲われます。たとえば、正義とか公正とか自由、博愛、平等、宗教の自由、報道の自由など、今まで疑いもなく正しいこととしてきた価値観が、その根底から疑わしいものに見えてくるのです。というより、その根底からもう一度考えなければならにような気がしてきます。この世は万人の万人に対する闘争であると賢者はいいます。民主主義は最良の政治体制ではないとも言い切る政治学者もいます。世が混迷してきたとき、ある一部を悪と決めつける極右の単純明快さは妙に説得力を持つものだそうです。アメリカのラストベルトと呼ばれる一帯の労働者は、右も左も支持しないといいます。未来の見えない人たちの支持をあつめられない右も左も中道も、混迷した時代は切り開けないのでしょうか。右ではなく極右のみが、あるいは極左が、共に声高に主張するところを聞くと、欲望の資本主義で紹介した若いチェコの経済学者の言う闇の力が目覚めたという言葉が頷けてしまいそうになります。ダーク・フォースなんて、スターウォーズみたいですが、ジュダイの騎士も闇の側に落ちそうになっているのが今なのでしょうか。
戦後の現行憲法下で育った私たちは、民主主義が当然と思い、何の疑いも持ちませんが、民主主義に付いてどこまで理解しているかと考えてみると、どうなんだろうと改めて思ってしまいます。
移り行く混迷の時代に２
何もかもが疑わしく見えるのは、私自身の中にも、闇の力が芽生えてきたからでしょうか。ほんの少し、まあここまでならいいだろうと気を許すと、そして、ああいってるけど、まあちょっとは当たってるよね、とか思ったりすると、その総和がトランプ氏になったり、ヒトラーになったりすることを私たちは学んだはずなんですが、そういったことに結びつくとも思わず、頷いてしまいそうです。といっても、それは全面的な肯定ではなく、ほんの軽い気持ちの賛成です。その総和がなにをもたらしたかを私たちは見てきました。例えばイギリスのEU離脱。私がトッド氏に興味を持ったのは、彼のEU離脱を論じた本を読んだからでした。
しかし、ここで一番不可解なことが生じてきました。トランプ氏を選ぶと、それはポピュリズムであるといいます。まさに日米のマスコミの論調は、これでした。とこ

ろが、今のロシアゲート疑惑にもかかわらず、トランプ氏への支持率が４０％もあると、いぶかり、首をかしげます。テレビの二流コメンテーターは露骨に理解不能な顔をします。洗練されたキャリアもなく、露骨に下品な言葉を吐き、実現不能な公約を口走ると、それによって扇動された、あおられたと言いだして、その挙句のトランプ当選をポピュリズムというのです。ではクリントン氏が勝っていればどうだったでしょうか。おなじ米国民の投票行動です。これをポピュリズムとは呼ばないのでしょうか。体制側の、今まで通りの価値観を継続して行うエリートの当選であれば、民主主義的選挙の賢明な結果だとでもいうのでしょうか。ここで気になるのがポピュリズムという言葉が何を意味するのかということです。そしてなぜ侮蔑的に言いきられなければならないのかということです。おなじ大衆の意志表示なのにです。
では、ポピュリズムの対極にある言葉は何かということですが、一応、民主主義としておきます。現代でこの二つが対立しているように取り上げられるからです。
その民主主義の基本理念を、端的に表した言葉は、government of the people, by the people, for the people といってもいいのではないでしょうか。しかし、民主主義を衆愚政治といったのは、だれあろう、プラトンでありました。
万事に関して知恵があると思う、万人のうぬぼれや法の無視が、わたしたちの上に生じ、それと歩調を合わせて、万人の身勝手な自由が生まれてきた。というのも、かれらは、みずからを識者であるかのようにおもうところから、畏れなきものとなり、その無畏が無恥を生むことになった。思うに、思い上がりのために、自分よりすぐれた人物の意見をおそれないということ、まさにこのことこそ、悪徳ともいうべき無恥であり、それは、あまりにも思い上がった身勝手な自由から生じてきている
みんなうぬぼれてしまい、法律を無視し、自分勝手な行動を取り始める。注意する人がいても、その人の言うことを聞こうとしない。民主政治の現実の姿はこんなものである
移り行く混迷の時代に 3
まるであざ笑うような口ぶりの言い方だとは思いませんか。逆説的な、諧謔的と言っていい言い方で民主主義を、肯定しながらも否定したい思いのにじみ出ている言い方がこれです。
民主主義は最悪の政治といえる。これまで試みられてきた、民主主義以外の全ての政治体制を除けばだが
このアイロニックな口ぶりこそ、チャーチルであります。あなたは本当に民主主義を肯定しているのかと問いただしたくなる言い方です。だがどこか疑っているのだとはおもいます。語源的には、 democracy ではありますが、これをして民主主義とではなく、民衆制といったり、衆愚政治とも訳されることさえありました。まるでポピュリズムと同じではありませんか。
それはさておき、プラトンは、
理想国家の成員は三つの階級に区分されなければならないと主張する。統治者、戦士

、普通の人である。そしてそれぞれが己に課せられた徳を実践することで、全体としての徳つまり公正が実現される。統治者の徳は智恵であり、戦死の徳は勇気であり、普通人の徳は節制である。これら各階級に固有の徳と国家全体としての徳との関係においては、国家の徳が優先される。国家が正しく運営されてはじめて、それに属する各個人の徳も正しいものになるのである。
と説きます。トッド氏の中で、時に気になるところがありました。トッド氏はケンブリッジ大学で学んでいるのですが、彼はイギリスで下宿しております。すると、そこの女性メイドが、この大学に入ったばかりの若造に、sir を付けて話すのだそうです。イギリスはもちろん階級社会です。それにしても大学に入りたての若造に sir はどうでしょう。トッド氏自身もそう思ったらしいのですが、ここに西洋文明の中でのエリートの役割があるのだとおもいます。知恵あるものは統治者になり、民を指導せねばならないという意識が社会に浸透しているのだとおもいます。ところがそのエリートが民衆を裏切っているのが現代社会だとトッド氏は見ています。大衆を離れ、自らの能力に任せて私利私欲に走り、民衆を省みないから、クリントンの属する階級は信用されなかったのだというのです。フランスでもイギリスでもしかりです。
移り行く混迷の時代に 4
アメリカで、誰が誰を支持しているかは、表面からは分かりません。しかし、あるインタビューでラストベルトの人たちが答えていました。
俺が誰を支持しているかって？そんなことは言えない。しかし俺は父の代からの、ここで働き、ここで生きてる労働者だってことさ。
民主主義体制に、グローバリゼーションは大きく影響したと多くの政治学者が言います。世界各国が貿易黒字を追い求める今、例えば中国はアメリカに失業を輸出していると、移民反対派の人たちは言っていますが、この主張が今の政治に反映されていないから、移民を敵視する扇動政治家が共感を集め、とんでもない人物が大統領になるのです。トランプ氏にどんなスキャンダルが起ころうと、支持率が40％を切らないのがそれを物語っています。しかし、それがポピュリズムでしょうか。そうなんです。ポピュリズムなんです。やはり、ポピュリズムと言わなければならないとおもっています。
人は怒っていたり、熱くなっていたり、嫌悪や恐れを感じているとき
とても悪い判断を下すでしょう そのとき、扇動政治家にひかれてしまうのです
と政治倫理学者はいいます。こんな持って回った言い方ではなく、哲学的慧眼で見抜いていた人がいます。
狂気は個人にあっては稀有なことである。しかし、集団・党派・民族・時代にあっては通例である。
彼はこう言い切りました。彼とはニーチェです。ポピュリズムとそれが導く結果を、こう定義づけておきます。第二次世界大戦のナチズムをドイツ中間層のヒステリーとトッド氏は言っておりました。世界中で中間層が崩壊している今、時代の狂気が目

覚めようとしているとしたら、チェコの若き経済学者の言うダーク・フォースとはこのことじゃないかと思います。
移り行く混迷の時代に 5
グローバリゼーションによる新自由主義経済は、確実に国内の中間層を狙い撃ちして崩壊に導きました。世界的グローバル化が進めば進むほど、例えば米国では国内製造業の海外移転が進み、労働者を失業に追い込みました。日本でも自動車産業が海外に生産拠点を移すことで、産業の空洞化が問題になったのでした。これは自動車産業に限らなかったのです。猫も杓子もといった事態で、地場産業まで中国、タイ、マレーシア、フィリピンへ進出してゆきました。そして、そこから逆輸入の形で製品が流入し、同時に失業と海外の低賃金との競争をもたらしました。正社員は契約社員に置き換えられ、中間層は崩壊していきました。厄災は契約社員と失業者のみならず、正社員にもおよび、過労死まで生みだしました。トッド氏の言う、グローバルファティーグがこれです。日本の一番の問題である少子化も、このことから派生しているとおもいます。にもかかわらず、現政権の推進していることは、庶民いじめのマイナス金利、大企業の法人税減税、消費税増税と、国内景気を冷やすことばかりで、無能としか言いようがありません。
いえいえ、無能ではなく、自分と自分の属する階級にのみ忠誠をつくす集団のみが、国家を形成しているのです。これはヒラリー・クリントンが嫌われた理由でした。
エリートは自分の役目を果たさず、自己利益を追求する集団に成り果てました。彼らが利用するのが、絶対的権力である国家機構です。フランスなどで民主主義が機能していないと感じられているのは、国家が国民を振り返らず、移民、難民を内なる敵として、テロリストを外なる敵とみなして、 なお問題解決をしようとしないからでした。トッド氏の言う機能していない政府とは、このことでしょう。難民、移民のことも、内側から起こるテロも、みな国内問題であるとトッド氏はいいます。ISに共感し、テロを起こすイスラム教徒も、自分自身がフランス国内での矛盾にさいなまれた結果、テロリストになるのです。これも経済格差による分断された社会同様、民族、宗教での分断を放置したことによるのだといいます。逆に、彼らにとっては手の施しようのない問題だから放置しています。経済のグローバル化は人のグローバル化でもありました。資本の利益のためには経済のグローバル化はやめられない、したがってそれに付随した人のグローバル化も仕方ない。国家という入れ物の中に、異なった、同化しようとしない他民族が入り込み、異質の文化が現れれば、人々には拒否感情が生まれ、排除しようとおもいます。民主主義は、他者の存在を認めることで成り立ちます。その他者への共感を忘れた民主主義はポピュリズムに走るかもしれません。
もう一度考えてみましょう。民主主義とは、日本憲法で言えば、国民主権のことです。基本的人権だの平和主義、三権分立、思想宗教の自由などは、国民主権を保証するだけのもので、同じ高さで言うことでもありません。ところが、国民主権を日本人はやすやすと手にしたので、つまり、それを戦いとった歴史もないので、あまりに当然

のこととしか考えておりません。フランス革命、アメリカ独立戦争、イギリス無血革命など、戦いのすえ手に入れた統治制度だとは思っていないのです。日本人は自分で手にせず、200万人の血を流して、その末に押し付けられた憲法で手に入れました。その押し付けられた憲法を不都合に思う人たちが改憲などとたわ言を言いたてています。何か違うと違和感を持ちます。

移り行く混迷の時代に 6

資本は国境を越えて、自由に動きます。外には発達段階の違う国家が当たり前に存在していて、それが資本にとって好都合であれば、かつては植民地にして収奪し、今ははるかに安い労働力を目当てに進出し、そこでの国家間の格差と時差をもって利益をむさぼります。安い労働力で世界の工場となった中国が、今や近隣のアジアに進出し、そこでの安上がりな労働力を買っています。つい先ごろのヨーロッパや米国がしたことを、いまは中国がやっています。経済のグローバル化は、形を変えた資本の帝国主義でありました。

ところが、日本で昔、工業製品を売るためには、米国の要求通り、農産物をどんどん輸入すればいいんだという乱暴な主張が、政権党から言われだしたことがありました。国内農業がだめになっても、食料は海外の安いものを買えばいいんだというのです。食料自給率などお構いなしの議論でした。TPPはその議論のお色直しにしか見えませんでした。そのTPPは今でも、依然日本の成長戦略の大きな柱です。政府は日本国内の狂牛病に対する基準を曲げてでも、つまり国民の食料安全を犠牲にしてでも、車を売ることを推進したのでした。

このような批判はさておき、資本の無国籍化と、現実にある国家の間での矛盾のことです。資本が利潤を求めて、国境を自在に超えてゆくことは見てきました。しかし、人は国境に囲まれた国の中で生きています。人々はそこに生まれ、働き、生活しています。独自の言葉と文化を持って生活しています。宗教のことは、日本人は他の国の人ほど理解できないようです。しかし肌の色には敏感に反応します。違う言葉を話す外国人を、日本人は受け付けません。受け入れないというのではなく、同化を求めないのです。日本は帰化が大変難しい国です。外国人に寛容な国だと、日本人自身は思っているようですが、かつては攘夷の国でした。今もって、尊王攘夷の国かもしれません。外国人を安い労働力として少しは雇い入れているようですが、EUやアメリカの比ではありません。それらの国では、隣に外国人が普通に暮らしています。日本では、外国人はお客さんとしか思ってなく、いつかは居なくなる、外から来た他所の人といった意識しかないのです。日本人より日本人の心を持ったと、よく外国人を高評価として言いますが、それでも日本人より日本人の心を持った「外国人」なのです。

国家という枠組みのことでした。日本人の意識を評してみました通り、国民として、人々はその国の領土の中に、伝統とか文化とか習慣とかに浸かって毎日を生活しています。そのことにわざわざ意識はしません。ところが異文化をもちこまれたとき、とたんに反発します。言葉の壁もあるでしょう。生活習慣のちょっとしたことに反感を

感じるかもしれません。中国人が黒人を見て、大きな声で話をし、地面に唾を吐き、他と交わろうとしない、云々の文句を言っておりました。外国で中国人が評価されるときの悪評がこれだと言うのにです。しかし、そんな些細なことが人と人の交わりを妨げます。こうして国家と国境は確実に存在し続けることになります。経済の枠も、国境の中にとどまっております。人々の豊かさは、依然国単位で決まってしまいます。それを決める大きな条件が、政府の行う政策によるからです。しかし、資本は利益を求めて、国境を飛び越えます。米国で現地生産する日本の自動車産業に部品を供給する日本企業の拠点のあるところは、メキシコでした。そして、日本の下請け企業がそのための部品をメキシコで作って供給するのです。人が行うことありながら、資本の動きを体現していると言わざるを得ません。国境の中に閉じこもった人と、無国境の資本。富裕層は、貧困層から富を吸い上げ、蓄えてまた一段と太り続けます。貧困層はただただ日々の暮らしに追われて、手にしたわずかのお金を使い果たします。この国内の格差を作る仕組みが、発達段階に時差のある国家間でも起こっているということです。

しかし、このことで世界は変化していってるようです。ISをどう見ますか。いまイスラム圏の若者のイスラム離れは深刻なのだそうです。もう女性の顔や体を真っ黒な布で覆い隠さなければならないという宗教的要求を不合理に思っている若い人は増え続けています。女性が車の運転をしてはならないなんてことから、結婚は親の決めた人としなければならないといったこととかだけでなく、毎日五回の礼拝を煩わしく思うといったことに及んでいます。経済のグローバル化がイスラム世界に大きな変化を持ち込もうとしています。ISとかイスラム原理主義はそれへの危機感を表していると言うことです。しかし、一つの社会が変化の時を迎え、変わっていくのにやはり何十年の単位の時間がかかります。揺り戻しもあるでしょう。それでも変わっていきます。人が人らしく生きたいと思えば、変わってゆきます。ヨーロッパのルネサンスから、ニーチェの神は死んだまで、時間はかかっても変化していったのですから。そして、そこから、共同体の破壊された、孤独の民主主義が始まります。

移り行く混迷の時代に 7

民主主義の孤独と言いました。資本主義と民主主義はまるで対立するかのように言いました。資本主義は経済の概念、民主主義は政治的統治の制度のあり方です。ですからもとから対立しようがありません。しかし資本主義になって民主主義が発達しました。それは資本主義にとって民主主義が都合がよかったからです。資本主義にとって、権力はできるだけ水平であったほうがいいのです。絶対王政とか、貴族政のように権力が垂直に貫徹しているのは、自由経済市場が成り立たないからです。また、身分制度があれば、次第に蓄積された資本の所有権が保証されません。所有権の絶対を法によって保障されることが、大事な要件でありました。すなわち、私有財産が完全に認められ、たとえ国家権力といえども、これを侵すことができない体制が資本主義には必要なのです。また、それが宗教的権威で左右されてはなりません。そのため

には、人間がすべて個として、国家権力とも対峙できるほどの権利が保障されていることが肝要です。そして、個と個の関係に対して、国家は調整役に回り、すべての行為が法律に則った契約によってなされるように法整備を行い、かつ紛争に対して調停を行います。自由経済市場はこのような仕掛けによって、貨幣を使って取引がなされるようになります。市場は、商品はもちろん、労働力も商品に変え、取引されることになりました。その取引のすべてが、契約によって成り立つのです。国家は、そのための仕組みとして三権分立と、個人の権利を保障しました。ですから、資本主義と民主主義の間に、自由主義という概念が入ってきました。自由民主党、自民党ですね。自由とは、自己の運命は自分で決めるということです。個の権利の確立です。そこから、宗教からの脱却と、共同体からの離脱が始まりました。共同体には家族も含まれます。今、日本人の頭の中に、家の概念はあるでしょうか。地域の結びつきは、都会に人が流れて崩壊しました。家族といっても、大家族は核家族化しました。今の人には、親の財産は子供が受け継ぐといったほどにしか、家族と家への意識はないでしょう。資本のもたらした、民主主義の孤独です。また、それは資本主義のもたらした孤独でもあります。人間は労働力であり、消費者でしかありません。個人は、自由に消費できることだけを幸せと思うようになりました。欲望のリンゴをかじったのは、イブでした。

移り行く混迷の時代に８

マルクス経済学の上で言うなら、国家は資本主義になって確立しました。しかし、歴史的には、国家は紀元前から存在しました。民主主義が統治の一手段であるならば、その統治の一つの手法としてその時代から存在していました。古代ギリシアの典型的ポリスであるアテネでは、前６世紀末までに参政権をもつ市民が直接的に運用する民主政治が行われていたのです。民主主義の語源になったデモクラシーはここから始まりました。

しかし、その早すぎた民主主義は、絶対王政、貴族政にとってかわられましたが、産業革命を待って、やっと復活しました。結局、庶民に力がなければ、権力は水平化しないのです。権力は権力という形をとって、垂直構造を保とうとします。特権階級は力を握って放そうとはしません。その力の格差を打ち破るには、虐げられた人々が力を付けることが必要です。そして、市民層は資本主義と市場経済により、富を蓄え、力を持つようになりました。中流階級の誕生です。歴史と体制を変えるのは、常に市民すなわち中流階級です。彼らは権力に対して、権利を主張し始めます。そして、上からの権力行使に対して力の水平化を望みます。これは歴史の必然であるとおもっています。人は誰しも、権力に踏みにじられていいはずはないのですから。

しかし、民主主義には直接民主主義と間接民主主義があるのですが、間接民主主義は、議会と首班に官僚制を備え、国家を形成して人々の上に君臨します。たとえそうなっても、選挙があるから、次に落とせばいいのだと思うかもしれませんが、そうなったでしょうか。国家は、多少の政権交代で目先が変わっても、依然国民の上に同じよ

うに君臨するのです。
移り行く混迷の時代に 9
モリだのカケだのと蕎麦のような論争に隠れて、今の総理が、国民と野党の目をそらそうと、憲法改正を言いだしました。権力の垂直支配のモデルのようなやり方です。共謀罪の成立過程もどうようです。国民は現政権に憲法改正を託したでしょうか。共謀罪など寝耳に水で、よくわからないうちに国会審議が進み、いかにも強引なやり方で成立させました。ところが国民は、これにあまり関心など持っていないようです。この審議の最中に、社民党の福島瑞穂氏に自民党側からヤジが飛びました。共謀罪で逮捕させるぞ。花見に行って、弁当だの敷物を持っていれば、一般国民、手に地図だのメモをもって入れば、共謀罪の容疑者。こんなばかばかしい答弁が法務大臣の口から出たのが、今回の共謀罪でした。なんて次元の低い共謀罪成立要件でしょう。また、権力に都合の悪いことを言えば、共謀罪で逮捕させることができるのが今回の共謀罪であれば、とても危険な法律が成立したと言わざるを得ません。国家はこのように君臨するのです。カケの答弁で、文科副大臣が、内部告発した公務員は公務員法違反に該当すると言い放ちました。これを一部マスコミはかばいましたが、これを権力の側が国会で答弁した途端、告発者は罰せられることを覚悟したとおもいます。公務員は公僕です。政府に対して責任を持って働くのではなく、国民に向かって誠実であらねばなりません。政府が、行政をゆがめたのであれば、その政府の権力の横暴を告発しなければなりません。権力の垂直的支配はこのように往々にしてなされているのです。
しかし、民主主義がそのような横暴を正すことができると思っては誤ります。民主主義に、そのような能力や仕掛けがあるとは、決まってないのです。そのために憲法で守られているのが、言論報道の自由です。報道は政府に誤りがあると思えば、これを自由に報道できます。言論の自由も同様。なのに、思想信条の自由をまで犯しかねない、また政府に都合の悪いことを言えば罰するとするやり方は、民主主義と国民主権を否定するものです。あのおぼっちゃまは矢張り危険です。こう書くと、私も共謀罪になるかもしれませんね。もっとも、罪刑法定主義までは否定しまいと、期待しますが。もっとも、おぼっちゃまは、そんなことも知らないかもしれません。
移り行く混迷の時代に 10
結局、民主主義体制も、統治の一形態でしかないということが分かったぐらいで、それ以上の深化はわかりませんでした。チャーチルの「民主主義は最悪の政治といえる。これまで試みられてきた、民主主義以外の全ての政治体制を除けばだが」という言葉を引用いたしましたが、これがまさに現状の政治体制を表現しきっていると思いました。この民主主義体制の原則は、現実としてなら多数決でしかありません。つまり多数なら正義ということになります。しかし、それが知性に適用された平等主義であったならいいのですが、多数派の暴走であったならどうなのでしょう。多数派は暴走し、少数派がふみにじられます。民主主義は常に検証し続けられねばならないの

です。主権者によって検証し続けられねばならないと思っています。沈黙は容認です。常に発言し続けることしかないとおもっています。
移り行く混迷の時代に 11
先日の(６月２３日の)読売新聞に、パラグ・カンナしへのインタビュー記事が掲載されておりました。パラグ・カンナ氏 39 とありますので、３９才なのでしょう、新進気鋭の国際政治学者だそうです。経歴をみると、シンガポール国立大学公共政策大学院上級研究員、インド出身、アラブ、ドイツ、米国で育ち、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで博士号、シンガポールの国籍とあります。邦訳された著書は「接続性の地政学」「ネクスト・ルネサンス」など。
しかし、インタビュー記事は、多分に刺激的な見出しが掲げてあります。
民主主義 勝ち抜けるか
中国の一帯一路 米は阻めない
連結する世界 供給網が主戦場
そして、聞き手の冒頭での問題提起は、
英国のEU離脱、トランプ政権の発足は、行き過ぎたグローバル化への、大衆の反逆である。これにたいして、グローバル化は誰にも止められないとカンナ氏は説くが、それについての見解をお聞きしたいと始めています。
これについて、カンナ氏は、トッド氏同様、米英はグローバル化の勝者であると、トッド氏と同じ見解から語り始め、大衆は自分たちの職を奪う中国やロボットに怒り、租税回避地に資産を移して税を免れている銀行や大企業に怒っているが、じつは、大衆はグローバル化への対処の仕方を誤った政治エリートとロンドン政府、ワシントン政府に怒っているのだと言います。このあたりも、トッド氏と同じ総括だとおもいます。
しかし、トランプ政権は、TPPからの離脱で、対アジア貿易の可能性を縮め、温暖化対策からの離脱でも、環境技術の勝機を逃した、グローバル化は重力に逆らうようなもので、誰にも止められない、指導者の責務は、、グローバルなシステムの中で、自国の利益を最大化することだといいます。国際競争に勝つには世界から自らを世界から切り離してはいけない、英国のEU離脱は過ちだ、と断言します。そして今、唯一の超大国の座から滑り落ちかかっている米国に代わってグローバル化の擁護者として登場した中国が、貿易では米国を抜いて世界一になったという事実を上げ、貿易関係は投資関係に移行し、同盟関係へ深化するといいます。中国はすでにグローバルな超大国だといいます。しかし、中国の下での世界平和はありえない、その力の差は歴然としており、中国は米国を脅かす存在ではないのです。それでも、米国は中国の一帯一路を米は阻めない、日本もこれに協力すると表明した、と指摘します。
移り行く混迷の時代に 12
一帯一路を米国が阻止できない理由は、一帯一路に関係する各国がこれを望んでいるからです。カンナ氏がこれをいっているわけではありませんが、一帯一路の通るアジ

アの各国々は、経済発展から取り残されており、グローバル化の外にいます。この国々は、そのため、中国の野望は分かっていても、それを受け入れ、経済発展を成し遂げたいとおもっています。そうである以上、米国がどう言おうとも、これを止めることはできません。スリランカ。パキスタンを横目で見ながら、それでも中国の進出を許そうとしています。EUはまた、遠いアジアがどうなろうと、利益さえ得られればかまわないのです。中国が高速鉄道の技術を、主には日本の新幹線をベースにしながら、ドイツ、フランスの技術を模倣して、今度はそれをアジアに輸出しようとしております。それでも、目先の利益が欲しくて、EUはAIIBに参加し、インフラ事業に手を挙げております。

さて、カンナ氏は、世界は多極化しており、その中で中国は超大国であり、EUも同じく超大国急であるといいます。日本は二番手としての大綱であって、その下にインド、ブラジル、ロシアの強国が並ぶと順位付けします。そして、北米、欧州、アジアは、程度の差はあるが、域内の経済統合が進み、それなりのまとまりを得ていると指摘します。そして、中国と日本には対立もあるが、お互いに依存し、補完しあう関係だといいます。中国と日本は、政治的に対立しているように見えても、経済では補完しあうパートナーだとだというのです。このあたり、少し認識が古いか、違っているように思えます。いま、日本の資本は中国とその他のところ、と考え始め、現在はアジアの他の国へ移っていっております。ですから、米国、EUからの中国進出は増加していても、日本からの投資は減少し、ベトナム、フィリピン、タイなどに向かってはふえています。

さりながら、カンナ氏は、接続性という概念を持ち込んで世界を分析しようとしております。この人の主張は、輸送、エネルギー、通信に大別されるインフラ(社会の経済・生産機構)が国境を越えてつながり、世界が結びつきを強めていく中、原料、部品調達から製造、流通、販売に至るサプライチェーンを握ることが死活的に重要だと主張します。

移り行く混迷の時代に 13

インフラとサプライチェーンという概念が出てきました。もう一度復習しておくと、インフラは社会の経済・生産基盤のことであり、サプライチェーンとは供給網のことです。インフラといい、サプライチェーンと言いますが、この上を流れてゆくのは結局商品であることを知っておかなければなりません。時々、このカンナ氏の議論はかんじんなところが抜け落ちているように思えます。

世界のインフラは、特に冷戦後急速に拡大し、その連結の度合いも、インターネットの普及もあって、量質ともに急速に飛躍的に増した。そのうえで、貿易、金融、科学技術の分野で激烈な競争が起こっている。供給網を巡る競争を巡る戦いが、今の世界の主戦場である。

カンナ氏の世界経済の分析はこのようです。これだけでも、早やどこかで訊いた議論のように思いませんか。そうでありながら、国際政治学者でありますから、政治学へ

とインタビューは向かいます。 聞き手の質問は、
世界の連結の度合いが増すことは世界の民主化に結びつくだろうか。
この質問は、私だって、違和感を覚えます。世界の経済的連結が進めば、民主化するか？とんでもない飛躍と、思い込みがあるのではないでしょうか。遅れた国が発展すれば、民主化が進む。これは民主化が歴史の必然と思い込んでいる議論です。民主主義は人々が自ら戦い取らなければ、もしくは自分も犠牲を払わなければ獲得できないものであって、天から降ってくるものでも、歴史の必然でもありません。カンナ氏も即座に、
連結と民主化に因果関係はない。私が住んでいるシンガポールは世界との連結の最も強い、豊かな国だ。しかし、政治は事実上の一党支配で、民主国家とは言えない。中国はこのシンガポールをモデルにして改革開放を進めてきた。そして、中国は民主国家ではない、中東のカタールも世界に開かれた国だが、民主国家ではない。
１８世紀の産業革命以後、反映してきた豊かな国は、民主国家だったが、現在はそれが当てはまらなくなっている。むしろ、連結した世界で供給網を巡る戦いを勝ち抜くには、民主主義は最適の制度とは言えないと私は考える。
とまで言い切ります。その例として、世界との連結を拒否した、英国のEU離脱とトランプ政権の誕生をあげます。
民主主義は機能したが、世界に結びつく戦略では誤った。
そして、複雑多岐になっている世界との結びつきをうまく管理するには、民主主義ではなく、シンガポールのような、機敏で強力なテクノクラシーによる政治支配が必要になるだろう。
テクノクラシーとは専門技術者による政治支配のことです。カンナ氏は、民主主義を擁護する立場から見ると、これは深刻な問題だといいます。何か取ってつけたような言い訳が、このインタビューの最後になっています。しかし、たとえば、大衆が反発したエリートと、このテクノクラシーがどう違うというのでしょう。エリートはまだ民主的な選ばれ方で当時の信任を得ていたのです。テクノクラシーはどういった手続きで国民もしくは大衆の信任を得るのでしょう。一党支配であれば、何をしてもいいのだと言ってしまえばそれまでです。
また、この主張は会社の経営では、トップダウンの経営方針で、これはこれでいいでしょう。しかし国は、営利目的だけの会社、もしくは資本のためだけのものではありません。
もう少しいいたいところですが、このカンナ氏の理論は、新自由主義の化粧直し、お色直しにもなっていない、会社経営ぐらいにしか通用しない経営理論でしかないとおもいます。せいぜいサムスンが賞賛された経営方針程度だとおもいます。
移り行く混迷の時代に 14
経済がグローバル化して、人物金が世界中を飛び回るようになると、その国特有の文化が希薄化してゆくのは、当然の成り行きであろうとおもいます。文化は当然に下部

構造の表象であるからです。文化の担い手がその国の経済の担い手でもあり、そこに意識の変化があれば、文化も変わります。
東京に８０年前からあるモスクは、世界でも有名な聖地になっているのだそうです。そこではイスラムに対する偏見も迫害も、また同じスラムの教えの宗派対立もないからだそうです。ですから、そこでは様々な人が来て、同じように祈ります。そこはイスラム教徒でなくとも、中に入って見学できます。そこに来ているイスラム教徒はいいます。日本人は寂しそう。それを聞いた日本人はちょっと首を傾げ、何を言っているのか理解できないといった反応をします。もし私も直接それを聞いたのだったら、同じような反応をしてしまいそうですが、半面、その不意打ちにああっと気が付くかもしれません。日本人はどこにもよりどころがなくなっていて、さびしいのではないか。そして、それに慣れてしまっており、それを自覚もしていないではないか。イスラムの人たちは、神が私たちと共にいてくださるから、さびしくないといいます。たとえ、神と共にではなくとも、どこかの、または何かのよりどころも失ってしまい、心を漂流させているのが今の日本人ではないかと思えてきます。私たちは仏教徒でもなく神教徒でもありません。地域共同体の一員かといえば、都会人は隣の人も知らないかもしれないのです。アメリカは多人種国家、移民国家。それでも信仰については保守的です。日本は単一民族でありながら、地域文化は一部、崩壊しています。そうでありながら、やはり心を漂流させているのかもしれません。欲望の資本主義は、むき出しの本性のまま、動いているのですから。
移り行く混迷の時代に 15
民主主義は、自立した自己を持つことだとおもいます。誰かに寄り掛かったり、自己を押し殺し、他の意志に無条件で、又は、分かっていながら意に反してでも従うことではないのです。これはプチブルの精神です。つまり、中産階級の精神だということです。中産顔級は精神の自由をもとめます。その自由のためには、権利と義務が生じます。
しかし、時代は限られた選択肢しか提示しては来ません。また、自己の意のままに生きれば、それが時代の矛盾を生むことになることもあります。
今から３０年ほど前、市場経済のルールがひそかに書き換えられました。資本が市場から利益を吸い上げる露骨な手段を是とするようになりました。格差が当然に起こるような仕組みとなったのです。持てる者のみがなお富み続け、わずか持っていた者は生活に追われて、その富を使い果たすように追い込まれました。いまの日本の金融政策が、それを露骨に表しています。マイナス金利など、誰のための政策でしょうか。金融政策などで、景気の回復なんか不可能だとは、もう多くの経済学者が知っているところです。しかし、それでもやらざるを得ないからやっているだけのこと。今の日本を見れば、それが分かります。インフレターゲットは達成できているでしょうか。アメリカでさえ、２パーセントのインフレ率を成し遂げられてはいません。その原因は何か。ネット通販だというのです。知っての通り、ネット通販は、通常の商取引

より、当然に安い価格でなければ買ってもらえません。消費者は、普通に店で買うよりは、通販が安いと知っているから、そちらから買います。それだけで、国のインフレ率が下がります。消費者のほうが、イノベーションに敏感に反応した結果がこれだということです。原油価格も、いくら産油国が減産しようとも、アメリカ国内で、シェールオイルを産出すれば、供給は過剰になります。また、中国が資源のがぶ飲みをしなくなったことも、資源の価格を抑える結果にはなっています。そんな、社会のルールをほんの小さなイノベーションが書き換え、世界の工場がその地位を他国に渡したことが、インフレを抑えてしまう、そうした逆の意味での経済のグローバル化を、国内経済のための金融緩和で操作できなくなっているのです。

移り行く混迷の時代に 16

民主主義とはという大それた命題を、世の片隅で、まるで暗中模索をしている如くに手探りで考えてきてみました。なにか焦るように考え出したきっかけは、なによりトランプ氏の登場でした。今回の米大統領選挙の結果が出るとマスコミと言論界は一斉にポピュリズムの大合唱が始まりました。同じ選挙なのに、あの無礼なトランプ氏が選ばれると、ポピュリズムだというのはなぜでしょうか。彼が無礼で無作法だったからでしょうか。彼はそれをも含めて選ばれたのでした。彼を支持したのが労働者階級の一般大衆であったからポピュリズムであると言うのでしょうか。一般大衆の反対語は、インテリゲンチャーであります。インテリ、エリートというエスタブリッシュが選ばれれば、大衆迎合の非難は起こりません。これは、まるで一般大衆は声を上げてはいけないと言っているように思えます。

わが総理大臣は、言ってのけました。

こんな人たちに負けるわけにはいけない。

私たちはこんな人たちといわれた、一般大衆なのです。

安倍 やめろ

とは叫んでいませんが。

移り行く混迷の時代に 17

今日も、人工知能ががんを見つけて医師に知らせるシステムを国立がん研究センターなどが開発したと、NHKのニュースが言っておりました。以前も、決まりきったルーティンの事務にロボットを使うという報道がありました。先に紹介した、大腸がん発見のニュースによると、医師のみが行う内視鏡検査では、大腸がんの内視鏡検査でがんを２４％見落としたという報告があるのだそうです。それに対して、人工知能による検査では９８％の確率でがんを見つけるそうです。ここで使われている人工知能は、正常な大腸の画像と大腸がんの画像など合わせて１４万枚を、ディープラーニングという最新技術に学習させたシステムだそうです。ほかにも、米ＩＢＭの人工知能「ワトソン」をがん患者の診断支援に使った東大医科学研究所の研究で、８割近くの症例で診断や治療に役立つ情報を提示したとの研究成果がまとまった、がんの原因となっている遺伝子変異を１０分程度で特定し、適切な抗がん剤の処方につながっ

たケースもあったというニュースもありました。
しかし、この人工知能に付いて、違った取り上げ方をしたアニメがありました。なんだ、アニメなどの話を聞く必要はないと思われるかもしれませんが、NHKのアトム・ザ・ビギニングです。放送はもう終了しました。しかし、終わってみると、人工知能に付いて示唆に富んだ内容だったかと思いました。
移り行く混迷の時代に 18
いきなり柔らかな話になってしまいましたが、あのアトムが誕生する前のプロトタイプのA106というロボットの話でした。Aがアトムのアであり、１０がト、6がムという設定になっておりました。アニメではエイテンシックスと呼ばれておりました。これを作っているのが、若いころの天満午太郎と御茶ノ水宏でありました。あのアトムをリアルタイムで見てきた筆者としては、このアニメは当初つまらないものにしか見えませんでした。放送はもう終わりましたが、終わってみても作品としては手塚治虫氏には勝てないといったら、酷かとは思いますが、この感想が最後まで続きました。しかし、この作品への感想がこの文章の本題ではありません。人工知能の、この作品での捉え方、描き方が日本的ではないかと思ったからです。
手塚治虫氏の鉄腕アトムの主題歌は今でも口ずさめますが、今回のアトムザビギニングでも、心やさしい科学の子というフレーズが出てきます。そして、最終回は見ているものを不思議な感覚に引きずり込みます。A106は機械ですから、壊れればつくりかえられます。それをA106のブヴェストザインは、時々見ており、最後は天馬午太郎に、ガラクタと化した元の機体を捨てておくように命じられます。このとき、A106はバージョンアップして、A107になっており、A106に乗っていた人工知能は、書き換えられてA107に搭載されています。その人工知能は、最後の戦いのとき、相手のマクロスとロボット同士の短距離通信で会話をしようとして 、マクロスからの返事がないまま胴体から破壊されますが、A106に話しかけられて、マクロスは必死に答えようとして自壊してしまいます。ロボットの使命は、人間に命じられたことを実現すること。
でも、僕たちロボットのすることはそれだけだろうか。攻撃型軍事ロボット、マクロスと、ロボットレスリングで戦いながら、A106は自問し、マクロスにも話をしようと問いかけます。A106は心優しいロボットで、知能ではなく、心を持っているのです。天馬午太郎は、大学のコンペティションで、他の研究班をあざ笑います。お前たちの人工知能はできるだけたくさんのデーターを読み込ませ、その中から最良の選択をするだけのプログラムだ、人の成長のように、自分の置かれた環境から自ら経験し、成長してゆく、心をもったブヴェストザインこそが最強だと言い放ちます。だからでしょうか、ロボレス大会で、天馬から全力で闘え、破壊しろと命じられても、じっと相手を観察し、心やさしく、相手をできるだけ破壊しない手段で勝利します。人の心を持ったロボット、心優しい科学の子、これがこのアニメに登場する人間側から見たA106です。
しかし、壊れたA106は、修理しようとする天馬と御茶ノ水や回りの人間を、時々電源

が入ったとき、みています。そして最終的に修理が完成し、A107になります。A107は捨てるように言われた壊れたA106を見つめます。この時、物語はなにも物語りません。

移り行く混迷の時代に 19

あのハヤブサのことを思い出しませんか？衛星糸川から砂を持ち帰り、最後に大気圏で燃え尽きたハヤブサに、私たちは涙したのではなかったでしょうか。そして、糸川の技術者たちは、最先端の技術でハヤブサをコントロールしながら、傍ら、神社のお札を張り、プロジェクトの成功を祈念しておりました。我々は、例えば物に愛称を付け、人に語るように語りかけたりします。なにか物にも人格があるようにおもったりします。ロボットが機械であれば、機械は目的を達成すれば、それでおしまいです。A106のようにマクロスと話したがったりはしません。しかし、こんな日本人の、物に人格があるように擬人化するのは、ひょっとすると、いたるところに神宿る、八百万の神々という感じ方が続いているのかもしれません。いま将棋名人を倒した将棋ソフトさえ、人間とは違うが、新たなライバルが現れたといったとらえ方をしているように見えます。このように欧米とは違った考え方を人工知能に対しても、日本人は余り抵抗なくしているのではないかと、このアトムザビギニングをみていて感じました。手塚治虫氏の時代はロボット3原則が大きなテーマでありました。しかし、アトムは涙を流します。感情を持ち、悲しみ、喜びます。手塚治虫氏の時代はそれが特段のテーマではなく、ロボットも人間のように感情を持ってふるまいました。しかしそれが、ブヴェストザインでなければ不可能であり、またそれが将来のロボットと人間との関係で、危うさになるといいます。それがA107が壊れたA106を見つめる時の沈黙にあるのではないかと思います。

移り行く混迷の時代に 20

日本は国としての成り立ちの中に、神話も持ち、仏教を国教として迎え、民間伝承の中に妖怪とお化け、幽霊を創造するという精神世界を作り上げてきました。怨霊さえ祀って守護神に仕立て上げます。八百万の神々はまるで人間臭く、それゆえでしょうか、神も次第に人間のすぐ上にまで下ろして、妖怪は人間よりすぐ下にまで持ち上げてきます。狸も狐も人のそばにいて化かしたり化かされたり、妖怪の中には人に富や幸せさえもたらすものもいます。

そのような精神世界を伝統として持っている日本人は、ものや機械にまで名前を付け、人のように接します。引退してゆく寝台列車に、ご苦労様と声をかけます。AIにも、そう接することができるのではないでしょうか。織子の職を奪った自動織機を丁寧に使い、古びて時代遅れになっても、部品がなくなれば自作してでも直して使います。AIというみたこともないものも、いつの間にかなじんでゆき、自分の文化に同化させるかもしれません。たぶん、対立はしないと、思うのです。自分の生活を破壊するとは思わないとおもっています。日本人は新しもの好きですから。

移り行く混迷の時代に 21

日本人の人生観に深く影響した書は、徒然草、平家物語、方上記、奥の細道だと言われています。これらの書に共通するものは、一言で言えば、無常観であろうと思います。私たちの生き方に、これらが示した人生観が反映されてはいないでしょうか。いまさらながらですが、ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらずを引用しましょう。方上記のこの一文は、日本人の無常観を的確に表しています。徒然草もまた無常観を説きますが、本節はそれがテーマではありません。
欲望の資本主義で、ひそかにルールが書き換えられたとステイグリッツ氏はいいます。それは、30年ほど前に不平等を生むようなルールの書き換えが行われ、市場経済の効率性が下がり、生産性の下落を招いた、金融市場は目先のことだけで機能不全に陥っていると指摘したのです。そして、ルールを再び書き換えれば、もう一度、反映を分かち合い、成長し、公平な分配がなされるようにすることは可能だといいます。
しかし、連日報道されるニュースをみると、そんなルールの書き換えなど、どこ吹く風といった風情です。EUは日本とFTAを交渉し、アメリカの抜けたTPPも11か国で発効できるよう方向に動いています。日本は、尖閣で対立する中国とも、一帯一路に協力を表明し、成長のためにはなりふり構いません。
しかし、このような有様をみると、欲望は満たされることを望まない、欲望は増大し続けることを望むという言葉が余りに真実を言い当てていると思えます。経済学は結局人間の欲望の科学だということです。そして、そのことに気付いた経済学者は、資本主義を超える経済学を模索し始めています。それが、禅の思想に影響されて、儚さという概念を唱えています。無常観です。私たちは、あの世まで持っていけないのにといいます。儚さとは違うと、私たちは思いますが、いくらむさぼってもあの世までは持っていけないのです。大幅な損益を出して、東芝を追い詰めているウェスティングハウスの会長は、巨額の赤字にもかかわらず、年俸を２１億円もらってたそうです。この人はあの世まで持っていくのでしょう。儚さを知らない人です。そして、ひょっとすると国も民族も大衆も文化も文明も食いつぶす資本主義を克服できるのは、無常観を持って生きている日本人かもしれません。しかし、福島原発をメルトダウンさせてなお、裁判で無罪を主張する旧東電役員、三人のような人間が現れてきているのですから、駄目になっているのかもしれません。
移り行く混迷の時代に 22
今の日本のこういう現状をご存知ですか。
平成26年度
全給与所得者に占める年収300万円以下の人口割合は40.9%。
日本の平均貯蓄率は ２０１１年で約2.3%
貯蓄率とは、家計収入から何パーセントを貯蓄に回すかという指標で、現在の日本は先進７か国中、最下位です。その結果、未婚の成人の40%が貯金ゼロです。こんな数字をみると、アベノミクスで景気は良くなったとか、結婚したがらない若者が増えたことが少子化の原因だなどと、若い人が結婚しないことを自ら選んでいるような言い

方が、いかに欺瞞か分かります。失業率は現状4.6%で、大変良好に見えますが、実はこの数字は３３か月固定化したように動いていません。ではそれが何を意味するかというと、この4.6%、277万人は完全失業のまま、つまり、３３か月就業できないままだということです。さらに、教育格差は、日本の子どもの相対的貧困率は実に15.7%、約6人に1人の子どもが貧困状態であるというのが現状です。そして、教育費の公的支出は先進国中、最低水準です。さらに、失業率自体は低くても、その中身は非正規社員が大半を占め、雇用の４割を占めています。そしてこの非正規社員も、派遣をパート、アルバイトに置き換えようという動きが顕著になっています。これが今の日本の現状です。

移り行く混迷の時代に 23

この日本にして、これです。しかし、リーマンショック以降、世界の経済は混迷に続けており、何かが明らかに変わったと言われています。そんな中、日本がなお成長を求めていけば、過労死という破たんが待っているとチェコの経済学者でアナリストトマス・セドラチェク氏が推測していることは、先に紹介しました。また、中央銀行による金利政策では景気のコントロールはできないとも言っております。現に、黒田氏が自信満々で言い放った2%のインフレ目標は達成できておりません。あの押しの強い風貌が、今はいかにも自信なさそうに変わって見えます。

それはさておき、資本主義は限界をむかえているのではないかとはおもいます。例えば地球資源をこうも食いつぶす産業構造が、いつまで続けられるのでしょうか。今年のこの暑さと、豪雨の繰り返しは明らかに地球の温暖化が原因でしょう。資本主義の膨らみ続ける欲望は、それをも無視して、なお成長を求めていきます。トランプ氏はパリ協定を脱退すると言いました。膨らみ続ける資本主義の欲望が、人間そのものを滅ぼして終わるのかもしれません。

いま、資本主義に代わる経済主義が求められています。それは、共産主義ではいけないのでしょうか。ベルリンの壁の崩壊と共に、ソ連も崩壊しました。共産主義はそれによって、振り返られない経済思想になりました。経済を活性化し、前進させているのが人間の欲望であって、ロゴスではないと気付いてしまったのです。しかし、日本のある経営者は、人々の生活に役に立つものを開発し、それを作っていくことで日本は成長してゆかねばならないと言っておりました。高邁な経済思想ではありませんが、こういった地道な考え方が、共産主義ではない、資本主義の次のものを生み出すかもしれません。

移り行く混迷の時代に 24

人々の生活に役立つものを作っていくことで成長するという、ごく単純な、普通の考え方が、次の時代を導く経済思想の萌芽に思えたのは、錯覚でしょうか。ステイグリッツ氏は、イノベーションが次の時代を切り開くと言っておりました。確かに、新しい技術が時代を切り開き、次々と新しい産業を生み、人々の生活を変えていくのを、私たちはみてきました。ラジオ、テレビなどの電化製品、電話から携帯、それが今は

スマホとあげれば切りないほどです。そんななか、私はツイッターとかフェイスブックなどは違うと思ってしまいます。これは、もの、ではない。単なるコミュニケーションのサービスで、これ自身は何も生み出さない、そんな風に思えます。情報が重大な価値を持つものだとは思いますが、もの、に付随するのであって、もの、が消えれば価値を失ってしまいます。日本人は、こつこつと、もの、を作ってきました。情報に追いかけ回され、情報で金儲けをしようとは思ってきませんでした。現代では遅れた考え方かもしれません。知識は力ですから。